

Title	日本語文化の強化から、強い企業文化の構築を
Author(s)	鶴岡, 洋幸; 熊倉, 千之; 遠山, 亮子; 近藤, 修司
Citation	年次学術大会講演要旨集, 23: 666-669
Issue Date	2008-10-12
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/7651
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

日本語文化の強化から、強い企業文化の構築を

○鶴岡洋幸（前 JAIST・COE 研究員）、熊倉千之（評論家）、遠山亮子（JAIST/中央大）、近藤修司（JAIST）
（JAIST: 北陸先端科学技術大学院大学）

1. はじめに

日本のバブル経済が弾けて 17 年が経過した。2006 年の世界の名目 GDP に占める日本の割合は 9.1% となり、24 年ぶりに 10% を割り込み、ピーク時の 1994 年と比べて半減。国民一人当たり GDP は世界で 18 位に後退し、このまま 30 年低迷が続くと記述する記事もある。国の経済施策も赤字国債発行のカンフル剤をこれまでかなり打ってきたが、これも一時凌ぎに終わり、国の負債の対 GDP 比は世界ワーストの域に及んでいる。日本の企業経営においては戦略不全の指摘もあり、利益率は長期に渡り低下の傾向にある。これに対してアカデミアの世界では、これまで文科省の COE プログラムで大学教育を社会貢献策へ効果的に繋げる努力をしたり、MBA・MOT 研究科を大学院に設置する等で企業経営への教育サポート強化を図ってきたが、一部実際上の効果について改善策を訴える意見もあり、その成果の確認には時間を要する状況と判断する。

ここで改めて日本文化の骨格の歴史的形成を考えると、日本は島国である事が物理的に基本となる。

- （1）先ず有史以前に人が言語・文化と共に日本へ移民して来た。日本語はウラル・アルタイ語分類の中でアルタイ語の範疇に入り、トルコ・モンゴル・ツングースを含んでいる地域の言語・文化が基本の骨格と成っている。
 - （2）その後仏教の伝来と共に、漢字(中国)文化が輸入され文字文化が新しく形成されて、抽象事象の表現が可能になり、平仮名・片仮名の文字の日本化が図られる。
 - （3）戦国時代から西欧文化との接触が始り、明治の開国と共にサイエンスを始めとする欧米文化を模範モデルとして積極的な導入が進み、国家の形成や産業の発達を意図して成功させてきている。
- すなわち、アルタイ語を基本とする大和言葉と文化（1）に漢字と漢字文化の導入により文字と新文化（2）を導入し、続いて欧米文化（3）の導入により国家・産業の興隆を図り、グローバル競争に耐え得る国力の涵養に成功してきた。大和言葉と文化を基本骨格として、全くの異文化を大きく分けて二度に渡り新しい文化思想・システム・技術として導入、咀嚼、融合、発展させて成功させてきている。これはパソコン PC に譬えると、大和言葉を OS (Operating system) として、この上に中国文化や欧米文化を Windows や Office の様に乗せて走らせてきたのと似ている。そして日本語が polyglot と言われる外国語を吸収し易い構造を持つことによりこれらが可能になってきたとの説明がなされている。

発表者は純日系企業の経験を経た後、仏系企業の日本法人に勤務して、マネジメントはフランス式、実行と顧客は日本文化であった経験から、異なる文化の強さと弱さとその相性を企業経営の観点から体験してきた。日本の産業競争力をみるとモノ造りで“追いつき”を達成し“追い抜いてリードする”かに見えた段階へ入った途端にバブル経済に遭遇している。その背景は、日本語・日本文化が、戦後復興からモノ造りの世界制覇まで成功しかけるところまでは維持できたが、新技術開発やビジネスの分野の競争力をグローバルなフロント・ランナー型に転換できるまでの文化的土壌を創造できなかった事に起因すると考える。文化は言葉を創り、言葉は文化を創るが、この二つは企業と国の競争力を培うための議論のプロセスと成果に抜群に大きく影響すると考えるからである。そして文化の問題は、同質の文化の中で生きているとその特質が感知できなく、異文化側の方から指摘されないと認識できないために、体験により自文化の特質が判る人と判らない人が出るので、議論の進め方も一筋縄では行かない難しさがある。

ここでは、高校まで日本育ちの日本人で、その後米国に渡り苦学されてカリフォルニア大学バークレイにて源氏物語で日本文学の Ph.D を取得した熊倉千之氏による日本語の特質をその著作と数回に渡る議論に基づいて先ずまとめた。そして日本語・日本文化の特質が、企業や国の会議のプロセスや成果まで強く影響している事を訴えて、企業出身者として日本の企業の競争力の向上策を考えてみたい。

2. 熊倉による日本語の特質を西欧語と比較する；〔一部（共同）発表者のコメントを追加〕

1) 言語の大分類

表－1 言語の大分類

分類	言語	特質
ウラル ・アルタイ語	日本・韓国・モンゴル・ハンガリー トルコ・フィンランド	・文字がなく、主観性が高い ・抽象語が文頭に立たない
印欧語	インド・ヨーロッパ・中国	・文字があり客観性がある ・抽象語が文頭に立つ(e. g., It rains)

2) 日本語と西欧語の比較

表－2 日本語と西欧語の比較

	日本語	西欧語
時制と場所	・話し手の立場から、“今”と“ここ”の時間/空間で表現する。(私語性) ・過去を表現するには、話者が体験した過去を現在化する。“てあり”→“たり”→“た”自分の記憶を蘇らせる	・S+Vがもつ普遍性〔客観性〕が表現の公共性をもたらす 主張が明確となる。(一般性) ・時間軸(過去－現在－未来)が時計の様に、誰にも同じ「時」として認識できる
人称代名詞	私：相手との関わりで定義され内在化しており正確には「自称詞」である	I：話者を客観的に指示し、外にも理解(定義)可能
名詞	”今”と”ここ”に具体的にあるものが名詞(抽象的な概念を表す名詞は元々無く、奈良以降は中国語を、近代は西欧語を転用)	・抽象的に定義され、具体化するときは冠詞などをつける。これが概念的思考を促し自然科学が生れた
形容詞 (水は冷たい)	話し手が対象に感じたものを表現することば(話し手が、水を冷たいと感じた)	名詞に付加してその「属性」を表現する(水の物性が冷たい事を表す)

3) “はなす(話す)”の意味が会議の性格と効率まで左右する。

日本語の“はなす(話す)”の意味は、“放す”からきている。つまり「思っている事を腹の中からへ解き<放す>」の意味。従って会議でも、まず相手に自分の腹を解放しあう事から始める。それが出来ない「腹の探り合い」は成果が期待できない。放された内容から会議の結論は足して2で割る事が有効になる場合が多い。一方英語では、talk, speak, converse, chat, tell 等、必ず相手に判らせる事を目的とする意をより強く含む「積極性」が顕著なので、論理的な話し方や会議での良い結論を得るための方法論まで意識した話し方に注意が向く。言葉のもっている背景や感覚が、文化の質や社会の効率に影響する一例と思う。

→話すをスポーツに譬えると、日本語はボウリング、西欧語はテニスとは明快な差を説明。

→日本語の“放す”ではディベートにならず、より良い結論を得るまでの深化に至れない

→モノ造りの現場では、感じたままをぶっつけ合う“今”と“ここ”の日本語の本質が生きる。

4) 文化人類学に影響する日本語と西欧語の特徴比較

表－3 文化人類学に影響する日本語と西欧語の特徴比較

日本語の特徴

- * (Polyglot): 違う言語を上手く吸収できる。
- * (私視点の私語性): 徹底的に話し手の、話し手による、話し手の為の言語。認識者の立場でしかモノが言えない私語性をもつ
- * (間人主義): 人を“人間”と定義し、人と人の間柄で成り立つ構造と捉えた。自分という者を他人との関係によって相対的に判断する。判断の基準と成るのは周りの人達の見方であり、集団主義の要因となる。他者の数を増やす事で客観の範囲を拡げる。この為「根回し」が必要となる。
- * (汎神論と絶対が無い世界): 神道は自然全てを神とした汎神論故に、相対的な思考の積み重ねに留まり、統合とか唯一に向かう議論が起こらず唯一絶対的、権威的な言語が発達しなかった。

(比較の意味で) 西欧語の特徴

- * (S+V): 3つの称と性の数により主語(S)が異なり、その主語に応じた述語(V)の活用があつて語尾を変化させる。この1:1の対応によって主語が独立した内容を客観的に表現できるために抽象化、概念化も可能と成る。
- * (主体性から思想へ): 上記の言語の形態から、個人の主体性が確保されて、個人主義が発達し、思想として意味を持つに至っている。
- * (唯神論と真理は一つ): 唯一の神は世の全てを創造し審判する。そして一つの真理に向けて議論が起こり論理が深化して哲学が構築される。ギリシャ語のLogosは本来「ことば」の意味だが、転じて理性・理論・概念・思想まで意味が広く、ことばと哲学がかなり近い。

5) 言語が与える、文化や企業活動への影響

表－4 言語が与える文化・企業活動への影響

項目	日本語	西欧語
抽象か具体か	具体化に強い	抽象化に強い
マクロとミクロ	ミクロ化に強い	マクロ化に強い
全体最適？部分最適？	蝸壺思考に陥り易い	統合化と全体最適に強い
経営の観点から ・ 基点 ・ 自分 vs. 現場との距離 ・ 経営陣 vs. 現場	・ 現場から入る (現場主義) ・ 近い ・ 一緒にやる	・ 戦略から入る (知識主義) ・ 遠い ・ 別々に考える
ビジョンと戦略	・ 行き当たりバッタリ	・ しっかり目標と戦略を立てる
議論の進め方と狙い	・ 具体から入ると、時に大きく外れる可能性	・ 抽象⇄具体の往還があるから大きく外れない

3. 言語が知識創造へ与える影響

1980 年代前半までに、日本のモノ造りの強さを (欧米側に) 説明できる理論やモデルはなかった。これに成功したのが、野中・竹内による SECI モデルである。これは日本企業の成功の理由は技能・技術の「組織的知識創造」によるものであるとし、組織的知識創造とは新しい知識を創り出し、組織全体に広め、製品やサービス或いは業務システムに具体化する能力とし、それを支えるのが人間知であり、この人間知を形式知と暗黙知に分けて分類した。日本企業の競争力の重要な源泉は暗黙知であり、人間の集団行動にとって重要な要素であるのにこれまで無視されてきたのが、欧米人に日本的経営が謎であった理由であると結論付けた。

1) 形式知と暗黙知の対比

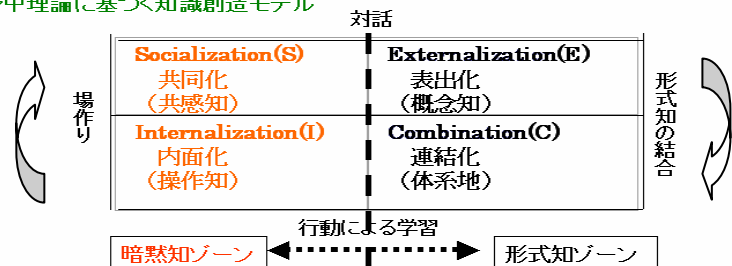
表－5 暗黙知と形式知

暗黙知	形式知
主観的な知 (個人知)	客観的な知 (組織知)
経験知 (身体)	理性知 (精神)
同時的な知 (今ここにある知)	順序的な知 (過去の知)
アナログ的な知 (実務)	デジタル的な知 (理論)

野中・竹内の記述では、暗黙知の同時的な知を“今ここにある知”と表現しているが、これは正に熊倉の言う日本語の特質の“今”と“ここ”性を表しており、又主観的な知は話し手によるものだからである。日本企業の職場で日本語で知識創造が行われているからこそその特質であると理解される。

2) SECI モデルでは、知識創造が職場の中で共同化 (S)→表出化 (E)→連結化→内面化 (I)→共同化 (S) とスパイラル経路でなされると説明しており、図-1 上の様な四象限グラフにまとめているので、専門書を参照して頂きたい。この SECI モデルの各象限に、これまで述べてきた日本語と西欧語の特質を当てはめていくと、綺麗に日本語の特質は左象限 2 つに、西欧語の特質は右象限 2 つに対応しており、これを図-1 の下に示す。左象限は暗黙知が主に働くゾーンで、右は形式知が主に働くゾーン。

①野中理論に基づく知識創造モデル



②熊倉氏の日本語・西欧語の特徴を上記の野中理論に当てはめると

- | 日本語 | 西欧語 |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 周りと同調し、自分の中に他者を取込み複眼的にモノを見る日本語は“S”が大得意。(時間が掛かる) ・ ここで他者を取込む“場”が重要 → ゴルフ、after fiveの飲み食い ・ 同調して決めた方針を実施するので、“I”も得意。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 概念化を行いながら、Visionに向かって他との差別化をすれば、文化的に“E”と“C”は得意。 ・ Visionに共感すれば“場”は出来易い。 ・ Top downは場作りが早い (時に個人主義で纏まらぬ場合も) |

図－1 二つの言語が得意な SECI モデルのゾーン

3) 言葉と文化が科学技術やイノベーションへ与える影響

- (1) 自然科学の認識
 - ・日本：感性で見ている。(日本語は感性に強い)
 - ・西欧：境界制御(理詰め)で見ている。
- (2) 文化が言葉を創り、言葉が文化を創る。科学が西欧で発達した理由に宗教を絡めた西欧語の特質がある。それに対応して、日本のモノ造り文化を日本語・日本文化が支えた特質もある。

表ー6 日本は技術が強く、欧米は科学が強い理由

(『この国のかたち』: 司馬遼太郎から)

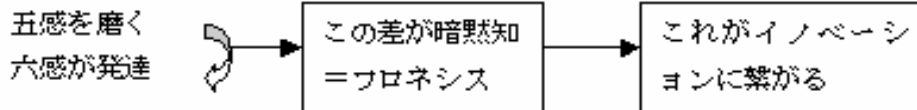
日本が技術(ミクロ)に強い理由	欧米が科学(マクロ)に強い理由
④ 仏教の渡来で形而的思考法が入るが、それも相対的な思考の積み重ねである ■ 如来は審判をしない ④ 明治以前、日本の思想に『絶対』は無かった ④ 神道は、自然を全て神とした汎神(はんしん)論である ④ 日本は技術の分野で堪能と言われるが、技術というモノは汎神論的な細々としたリアリズムの上に立っているから、得意芸になると思える	④ God(G)は哲学的な絶対者でこの世の全てを創造し、審判する。 ④ 欧州の哲学者はギリシャ以来、『絶対』と言う唯一の虚構(F)を中心に置いて、千数百年思弁的な営みを続けて欧州文明を創った ④ 欧州に置ける虚構(Fiction)(F)は絶対虚構で、欧米の文化に相続されている ④ このGとFから科学が起こった。その後も科学の原理の殆んどは、このFの土壌から発見されている

上記の虚構(F)とは、即ち現象並びに理想のモデル化である

(3) イノベーションを起こすためには日本語を磨く事

日本人として、日本語をしっかりと磨く事

- ・日本語を磨く事が、日本人に感性を育てる→暗黙知を育てる



4. まとめ

- 1) 高度成長を支えた日本のモノ造り大作戦が成功したプラットフォームには、日本語・文化をベースとする暗黙知文化があり、これが知識創造の SECI モデルを上手く回した要因がある事を理解するべき。(日本語を磨く→日本の感性を育てる→暗黙知→フロネシス→イノベーション)
- 2) 暗黙知はマイケル・ポランニーが認識論で提案しており、彼はハンガリー(ウラル・アルタイ語)育ちである。
- 3) 日本の常識は世界の非常識と言われるが、これは日本語・文化の特質に由来している。グローバル競争を勝ち抜くためには、グローバル文化を理解して、日本語・文化の本質(長所・短所)を理解した上で、毎日の話し合い、打ち合わせ、議論を行い、然るべき結論を出すのが肝要。日本語の会議では、“今の自分”を考えて“私視点”で“他人との調和”を優先するので、上位の概念のイノベーションを起こし難い点を認識して、良い未来創りのための良い文化(言語)創りの上位志向性を持つべき。
- 4) 強みを生かす意味で、日本語を磨き日本語の感性をもっと育てる事が重要。このため小学校教育に英語教育を持ち込むのは、感性の育成が虻蜂取らずになるから、言語道断である。(熊倉)
- 5) 強みを活かし、弱みをしっかりと補強する意味で；
 - モノ造りの匠+理念と Vision付きで、地球(環境)運営に波及させる。
 - 日本語の特性を身につけた Philosopher を育てる。これを企業、大学・アカデミア、政府、中央官庁、自治体全てに適応する。